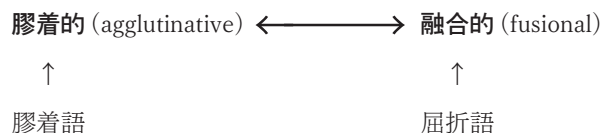


朝鮮語・トルコ語のようにそれぞれの意味を持った形態素がつながっていきようなタイプの言語で、屈折語はラテン語・ドイツ語・ロシア語のようにそれぞれの意味がどの形態素に相当するかがはっきりと形式の上で分けられないものを指す。



Column③ 抱合語 incorporating language

動詞が独立した名詞を取り込んで全体をひとつの動詞としてしまう抱合と呼ばれる過程を持つ言語がある。抱合は動詞を主要部とする一種の複合であり、日本語でも「傷をつける」と「傷つける」のような例があるが、日本語においては固定したいくつかの動詞にそのような構造が見られるにすぎず、「印つける」「バツつける」「薬つける」「おまけつける」「醤油つける」のような語を作れるわけではない。(これらの例は「を」が省略されたものとしては存在可能だが、その場合は1語となったわけではなく、「バ'ッ、つけ'る」のようにアクセントやポーズの挿入可能性からも2語であることが分かる。)抱合語としてはアメリカ先住民のいくつかの言語がよく知られているが、ここではM. Shibatani (柴谷方良)のThe Languages of Japan (Cambridge University Press, 1990, p.63)からアイヌ語の例をひとつ示そう。

Inaw a-ke (inaw「イナウ」、ke「作る」、a-「他動詞につく接辞」)

Inaw-ke-an (inaw「イナウ」、ke「作る」、-an「自動詞につく接辞」)
「イナウ(アイヌの祭具のひとつ)を作る」という内容の文だが、2番目の文では名詞(ここでは目的語)のinawが動詞に取り込まれて、自動詞化している。目的語が動詞に取り込まれるという抱合によって文法項が減り、他動詞は自動詞化するのである。

9 形態変化と語順

ロシア語では「オリガ(Ol'ga)がアナスタシーヤ(Anastasija)をたたいた」というのをOl'ga udarila Anastasijuと言ってもAnastasiju udarila Ol'gaのように語順を変えても、名詞の形態変化があるのでオリガがアナスタシーヤをたたいたという事態を表すことは変わらない。オリガには主格形のOl'gaが、アナスタシーヤには対格形のAnastasijuが使われているからである。しかし、英語ではMargaret hit Jennifer(マーガレットがジェニファーをたたいた)という事態をJennifer hit Margaretという語順で言うことはできない。英語のように形態変化が少ない言語では、それが多言語において形態変化が担っている機能の一部を語順が担う。ラテン語は形態変化の多い言語であるが、後のほうの時代になるとその一部が失われ、それとともに語順の自由度が減少した。なお、形態変化の大きな言語では語順の違いを別の目的に使うことができる。(コラム⑩「主題と主題化」を参照のこと。)